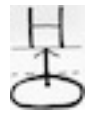


さくら通信



Hoju
Group
宝樹会

No.9

2018

宝樹会によるウィーン発の浄土真宗会報誌

道を求めるころ (6)

雪山童子の求道

岡本英夫

腹が減って言えないのなら食べ物を自分が用意しよう。周りには誰もいないから恐ろしい声を出しても大丈夫だ。このように条件を自分で整えてしまっていますから、童子の要求は真剣さを増していきます。その真剣さに押されてか、羅刹は自分の食べ物を言うのです。

「それなら言おう。俺の食べるものは、ただ人の暖肉、飲むのはただ人の熱血だ。」

人の暖かい肉と熱い血ですから、死んだ人の肉ではない。生きている人間が食べ物だと。童子の身が身体的には生きていても精神的に死んでいるようなら俺はくわないぞ、という意味もあるでしょう。全体としては、今のお前のすべてを道を求めることに投げ出せという意味でしょう。道は、自己のすべてを投げ出さないと見つからないものだ。道に向けて投げ出さない心があればそれが道を分からなくしているのだと。

童子は覚悟を決めます。自分の身を捧げようと。その決心のところに生きた身と心のすべてがあると言うことでしょう。羅刹、即ち善知識(注1)は、私たちにその決心を待っているのです。いのちを投げ出して求めよと。

決心した童子は言います。

「羅刹よ、どうか後の半偈まですべて説いてください。偈のすべてを聞くことができたならば、私はこの身をあなたに差し上げましょう。この身は死んでしまえば、何の役にもたちません。」



木のもとのお話(9)

お釈迦様のお教えは、男女、貴賤、年齢その他の差別なく、全ての人のためです。聖者や特別な人ではなく、あらゆる人間のための教えです。このことをご理解されてから親鸞聖人は身をもってそれを示されました。結婚もしましたし、肉食もしました。

注1 善知識 仏法の指導者

注2 凡器 価値のあまりない平凡な器

注3 七宝の器 仏法を受け入れることのできる器

注4 金剛心 壊れることのない真実の心

注5 六度 菩薩の歩むべき道

注6 菩薩 真実を求めて歩む人

注7 十方 世界中の

注8 諸仏世尊 真実に出会って生きる人

私は真実を求めたい。たとえこの身を捨てても真の身を得たいのです。」

童子は決心し自分の身を差上げると言います。しかし、その言葉を羅刹は簡単には受け入れません。

「誰がそのような言葉を信ずることができようか。真実のために我が身を捨てるなど。」

このように言って、童子の心をさらに確かめるわけですね。羅刹としての存在意味がいよいよ発揮される所です。善知識としてもここは正念場なのかもしれません。真に求め抜く人に育てていく。そのクライマックスの場面です。

童子は必死の懇願をします。

「あなたをご存知ないのですか。人に凡器（注2）を施して七宝の器（注3）を得ると言うことがあります。私も我が身を捨てて金剛心（注4）を得ようというのです。あなたは私の決心を信ずることができないと言われるが、今ここに証明を求めることができます。梵天王、帝釈天および四天王、皆このことを証明してくださるでしょう。また大乘を修行して六度（注5）を成じた諸菩薩（注6）も、十方（注7）の諸仏世尊（注8）も皆証明してくださるに違いありません。」

凡器が変じて七宝の器になるという、法の優れたはたらきを述べ、自らの決心は主観的なものでも私的なものでもなく、天の神も諸菩薩も皆ご存知のところだという、決心の公性を述べます。あらゆるものによって知らされる私の決心、そこにこそ、個人の思いで捉える私的なものでなく、公の場で明らかにされ、それを存在の根拠とする真の不動の決心があるのです。

これに対する羅刹の答えです。

「お前が本当に身を捨てるというのであれば、残りの半偈を説くとしよう。よく聞くのだぞ。」

これを聞いて、

「童子は大いに喜び、身に着けていた鹿皮の衣服を脱ぎ、敷いて羅刹のための法座とし、長跪して申し上げた。「師よ、どうかこの座にお坐りください。そして私のために残りの半偈を説いてすべてを説き尽くして下さい。」」

鹿皮の衣服を脱いで、羅刹の座としたというのはどのようなことでしょうか。自分が着ているものは自分にとって大事なもの。これを差し出さなければ、つまり自分自身を差し出さなければ教えは聞けないということでしょう。自分は自分で大切なものを自分のために確保しておいて、自分とは関係のない他のものを相手に差し出して教えを聞こうとする心、その心に教えはどれだけ入ってくるでしょうか。

仏教の教えは、どこでも聞けるものであり、またどこでも聞けないものと言えるでしょう。もし自分がどうしても聞きたいというのであれば、どこかで開かれている仏教の会に参加することになります。これが普通のあり方でしょう。しかし、その会が周りにないとすれば、どなたかに会を開いてくれるように頼まなければならない。もしそのような人もいないとなれば、自分で会を開かなければいけないことになります。

待っていてはいつできるか分からない。だから自分のところでやるしかない。即ち、自分自身の何かを差し出して、自分の家とか、具体的な場、色々な備品、そもそも自分の時間とお金、労力、そういうものを差し出してでなければ、聞くことは難しい。これが自ら立ち上がって聞くことの具体的な姿ではないかと思えます。

（続く）

